

## ■ 大熊実次郎の履歴 / 藤本増夫（大熊実次郎の兄・大熊岩吉の玄孫）

- 1837年(天保8)11月20日 塩飽本島甲生浦生まれ  
(咸臨丸に関係するまで何の記録も残っていない)
- 1860年(万延元年) 幕府遣米使節随判艦咸臨丸乗組員(鉄砲方水主小頭兼楫取賄方)  
文久3年まで水主小頭兼楫取賄方として、4年間咸臨丸に勤め、対馬、小笠原、長崎等の航海に参加する。
- 1863年 神戸海軍操練所設立準備のため大阪へ(勝海舟の海軍塾手伝い)
- 1864年 神戸海軍操練所設立、神戸に移動
- 1865年4月 神戸海軍操練所廃止  
(元治2年3月) 密命により神戸海軍操練所の施設の管理をする。
- 1867年(慶応3年) 紀伊和歌山藩がニホール号を購入時、試運転を勤める。  
良好な成績を収める。
- 1868年1月 神戸開港にともない、操練所の施設を(網屋吉兵衛の船たて場ドック)  
(慶応3年12月) を使い、船の修理、整備を行う。塩飽大工を呼び寄せ操業する。(真木徳助、溝淵和太郎、木本悦治郎など、神戸家具の起源になる船大工もいた。)  
明治になってからも神戸操練所で帆船の操縦にあたった。
- 明治10年1月12日 内務省交付第7号二等運転手仮免状取得  
第一号二等運転手免状取得 我国初の甲種船長
- 明治15年 兵庫県下兵庫川崎町三軒屋に船具の店、嶋ノ上町に工場航洋造船所大隈支店を営業する。住まいは相生町にあった。明治15年『豪商 神兵湊の魁』(垣貫興佑出版 熊谷久栄堂出版)
- 1906年(明治37年) 神戸市東尻池の航洋造船所大隈支店を、株式会社川崎造船所運河工場(現川崎車輛工場)に引き渡し、本島に渡る。兄岩吉の子の金造と孫の文吉に晩年の世話をしてもらう。家は甲生浦東光寺前、大熊文吉の東隣にあった。
- 1918(大正7)年2月18日没 享年82歳  
戒名=法光院義教良乗居士。本島町新在家に埋葬がある。  
大熊岩吉=実次郎の兄  
大熊金造=甥  
大熊文吉=金造の長男  
大熊金市=文吉の長男、藤本シズエ=文吉の四女  
藤本増夫=シズエの長男

明治4年頃からの生田川の付け替え等のより、港湾の大幅な移動があり、それからの10年の歩みが知りたいと思っています。

実次郎が引退して本島での生活の中で、島の子どもたちに咸臨丸や船の話を多く語っていたそうです。私の調べた話は、10年前に亡くなった東光寺の住職がこどもの頃の話でした。どのような話をしていたのか今は手がかりがありません。